



# なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



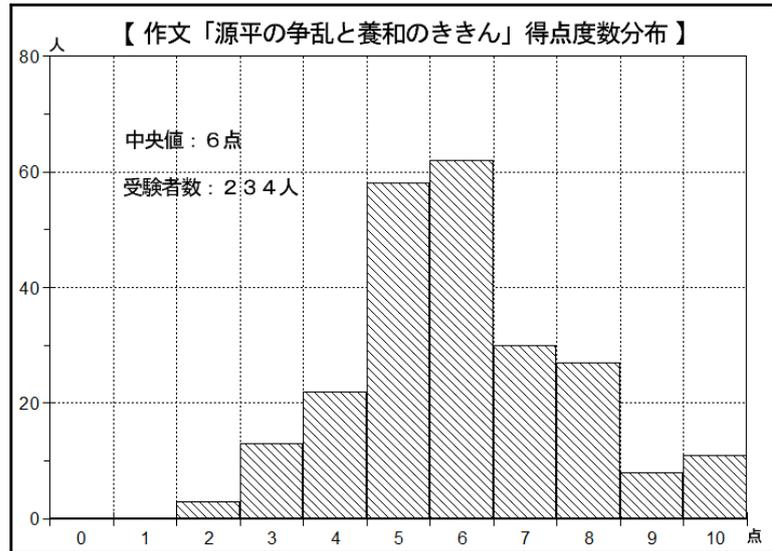
No.55

## 『方丈記』から学んだこと

### 1 「本格的な作文」が書けるようになってきました

学年末試験の課題作文で『方丈記』に記された養和の飢饉から、何を学び取り、学んだことを、君たちが自分の生き方にもどう活かすのかを尋ねました(課題文は「**なんでやねん** No.52」を参照してください)。

全体的な作文の評価結果は、右図に示すように中央値が6

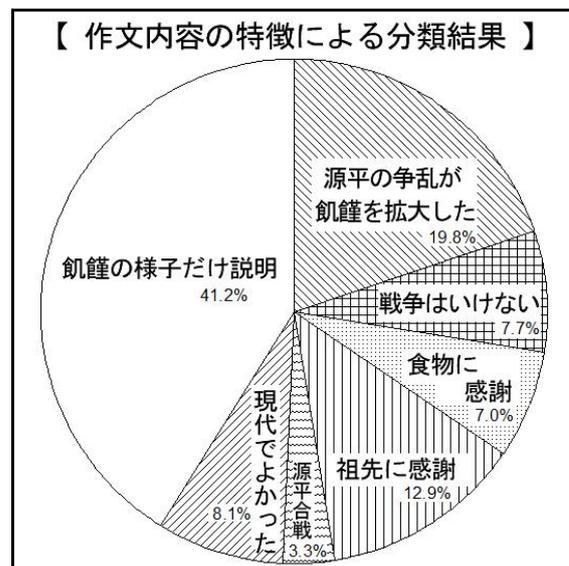


点です。前回の2学期期末試験の課題作文よりも1点低い中央値になりましたが、全体的には「本格的な作文」が書けるようになってきたと言って良いと思います。というのは、前回までよりも採点基準を相当厳しても、中央値が高くなっているからです。『さすが〇〇中学校の生徒たちは優秀だ』と私(倉橋)は思います。成績が振るわなかった人には、今後の奮起に期待します。

### 2 作文内容には、一人ひとりの個性が見られた

作文には、作者の個性が出ます。今回の課題作文では、養和の飢饉が起きた原因を、自然災害として理解した人と、自然災害を源平の争乱が拡大したと理解する人とは、飢饉に対する意見(主張)に違いが出ました。

飢饉の様子だけを説明する作文が41%を超えました(右の円グラフ)。一方で、飢饉の悲惨な歴史から「感謝」にたどり着いた人もいました(約20%)。また、キリスト教の教えとリンクさせて考えていた人もいました。



### 3 どのように作文を書けば良かったのか（採点基準）

【採点基準】今回の課題作文では、源氏と平氏の争乱により(原因)、養和の飢饉が拡大されたこと及び、飢饉の様子(結果)を史料から引用(2カ所以上)して、作文全体が小学校6年生に理解できるように、筋道をたてて説明することが必要です。

史料の引用方法は、「 」で明示することが望ましいのですが、同じ意味で内容を引用していれば良いと思います。引用文は次の②③④のいずれかで利用していると1論点につき2点を加点します。ただし、自分の理解(意見)が読み取れない引用文だけの文章は0点とします。

①背景の説明(2点)、②養和の飢饉を拡大した原因、③養和の飢饉の様子、④源氏と平氏の争乱について自分が考えること。⑤作文全体がわかりやすく筋道を立てて表現できていること(2点)。なお、説明内容があいまいだったり、誤りを含む文章は1点。説明や文章間に論理矛盾がある文章は加点しません。採点方法は加点法。10点を上限とします。

#### ① 背景の説明

- ㊦ 史料が鴨長明の『方丈記』であることを指摘している。作者の鴨長明が生きたのは平安時代後期から鎌倉時代前期である(時代を誤らないこと)。当時は、少しの旱魃<sup>かんばつ</sup>でも不作になるほど農業技術が未発達だったことに触れている。
- ① 源頼朝が伊豆で挙兵した年は、東国が豊作で、京都や西国が不作から飢饉になっていたことに触れている(40年後の寛喜<sup>かんぎ</sup>の飢饉<sup>ききん</sup>と混同しないこと)。

#### ② 飢饉を拡大した原因

- ㊦ 源頼朝が東国を、木曾義仲が北陸地方を支配した。やがて源氏は京や西国への食料輸送を止めた。それが飢饉を拡大させたことに触れている(食糧戦略)。
- ① 戦のための兵糧米の徴収が農村の人々(農民)を追い詰めた(西国の平氏領)。

#### ③ 源平の争乱の結果（飢饉の様子を具体的に説明していること。）

※ 次にあげる以外の論点でも『方丈記』に関連していれば可。

- ㊦ 武士の戦争(源氏と平氏の争乱)が、罪も責任もない、多くの民衆の生活や生命を危険な状況に追いこんだことを指摘している。
- ① 生産力が低いのに年貢の取り立てが厳しく、貧しい農民は不作の時の備えができなかったことを指摘している(二毛作は未だ始まっていない)。
- ㊦ 戦争が起こると、武士は年貢に加えて兵糧米を取ったので、民衆(農民)はさらに苦しんだことを指摘している(京以外の農村(田舎)でのこと)。
- ㊦ 都市に住む下級役人や民衆は、食料を蓄えることができなかったので餓死しやすかったことを指摘している(平安京には農地がなく、農民はいない)。

#### ④ 自分の意見

- ㊦ 武士の戦いについて、学習前に自分が持っていたイメージを説明したうえで、学習後に考えるようになったことを具体的に説明している。
- ① 飢饉についての対策や、戦争に対する自分の考えを表している。

## 4 友達の作品から学ぼう

次に、8点以上の「答案」の一部(36人分)を紹介します。主張(結論)は似ていても、主張に至る根拠は様々です。ここで紹介する作文は、「養和の飢饉から学んだことを、どんなことを中心にして小学生に伝えるのか」を「主な指標」にして分類しています。

なお、「原文」のまま紹介していますので、文中の誤字・脱字は修正していません。注意して読んでください。「答案」の下の(※寸評:)は、私(倉橋)のコメントです。

### (1) 戦争が人々を苦しめた

**B組 A.I.** 絶大な勢力と権力を誇った平氏が源氏に敗れた背景には、かんばつや洪水等の自然災害と人災がある。平清盛は戦いに備えて関西各地から兵糧米を集めようとしたが、集まらず、食料面では危機にあった。更に、寄せ集めの兵士で士気が低く、軍の人数も少なかった。よって、脱力者が多かった。方丈記は、「二年間というもの、飢饉で」「京という所は、とにかく何をすることも、先だつものは田舎から米が来ること」と説明している。源頼朝と木曾義仲らが京都の物流を停止したので、京都は飢饉がますますひどくなった。田舎でも飢饉が起こり、食料を求めて民衆がどんどん都に流れてきたのも都の飢饉の拡大の理由の1つだ。「金目のものが金目にならず、食料のほうが高くつく。」とあるように、物が無いので、お金の価値がない。私は、これは第二次世界大戦と同じような状態だと気付いた。また、この時代は権力者の一声で民衆の命は奪われてしまうこと、そしてそれは長くは続かないのだと思った。

(※寸評:源氏の物流を止める戦略によって、京の飢饉が拡大したことを簡潔に説明できています。さらに、この作文は地方から都に多くの人口が流れ込み、飢饉をさらにひどくしたことに触れています。第二次世界大戦の時に日本は戦場の兵士だけでなく国民も飢えたことに言及している高度な内容を持つ作文です。ただ、「脱力者」ではなく「脱走者」でしょうね。)

**B組 Y.F.** 源氏と平氏が争乱した頃の人々の様子は、鴨長明が書いた『方丈記』から読み取ることができます。

西日本は、干ばつなどの天災により、飢饉にみまわれます。平氏は源氏と戦うために兵糧米を集めようとしませんが集まりませんでした。

「京という所は、とにかく何をすることも、先だつものは田舎から米が来ることであって、それを命の綱にしている」と記されているので、当然、平氏の都中は食料危機に陥ります。源氏は、平氏をさらに追い詰めるべく、東日本から西日本への物流をさえぎるのです。平氏は、資産をお金にして、持っていましたが、この状況になると、それは何の役にもたちませんでした。翌年になると伝染病が流行し、「馬や車も通れない」ほどたくさんの人が死にました。もし、源氏と平氏が争乱をしていなければ、東日本から食料を送り、被害を小さくできたかもしれません。

そう思うと、源氏と平氏の戦いこそが、人々の生活を苦しめたのだと私は思います。

(※寸評:史料が鴨長明の『方丈記』であると最初に宣言して、引用する史料を明確にしています。さらに、飢饉で民衆が苦しめられた原因は、源氏と平氏の戦いにあると簡潔に説明できています。ただ残念なのは、飢饉の様子があまり具体的ではないことです。さらに、もう少し「物流をさえぎる」の意味を説明できると、もっと説得力のある作文になりました。なお、「平氏は、資産をお金にして」というのは不正確です。)

**C組 M.A.** 養和年間、西日本は不作だった。春・夏、雨が降らなかつたり、秋、台風・水害など、運の悪いことが続いて、農作物がみんなだめになり、夏の田植えの行事だけがあって、秋・冬のとり入れのいぎわいはなかった。普通、西日本が不作のとき、東日本が豊

作である。平氏は西日本を中心に支配していたが、こういうときのために、関東地方の一部も支配しており、そこから輸送していた。しかし、源頼朝が伊豆で兵をあげたため、関東地方からの輸送がストップしてしまった。さらに、平氏は源氏と戦うため、兵糧米を集めようとした。そのためだてさえ少ない食糧がもっと少なくなり、人々は飢えに苦しんだ。こうした第一年はすぎた。しかし、翌年はもっとひどかった。史料には「翌年は何とかなると思っていると、反対で、そのうえに伝染病まで加わっていいほうに向かう様子はちっとも見えない」とかいてある。この飢饉に伝染病まで加わればとんでもないことになる。そして多くの死者がでた。史料の「賀茂の河原なんかでは、死体が多く捨てられて、馬や車も通れないほどだった」という文からも死者の多さが分かる。この時代は、源平の争乱に目がいきがちだが、このような人々の苦しみがあつたことを忘れてはならないだろう。

(※寸評:最後の「源平の争乱に目がいきがちだが、このような人々の苦しみがあつたことを忘れてはならないだろう」という表現はとても光ります。ドラマなどでは武士の戦いにスポットライトが当てられ、殺し合いが格好良く描かれます。しかし、本当は、殺し合いは最も醜い行いのはずです。人の苦しみに焦点を当てた、この作文の作者の感性に拍手します。)

**C組 M.M.** 源氏と平氏が戦っていた頃西日本は飢饉でひどいことがあつた。「方丈記」にその頃の様子が書かれている。雨が降らなかつたり、台風・水害などが続いて農作物がとれない。京という所は田舎からの米をたよりにしているけれど、全然来なくなり、家財を売ってもほとんど売れない状態だった。その上伝染病も加わり、身分の高い人までが食べ物を求めるようになった。そうしてたくさんの方が死に、都には餓死者がいたる所にいた。数えただけでも4万人の死者がいたそうだ。このように方丈記には災害や伝染病で飢饉が起きたと書いてある。でも、それだけではない。平氏は源氏と戦っている時、もともと少ない米を兵糧米としてかき集めた。また東日本は、食べ物があつたにもかかわらず、源氏が都の前で物流を停止したので都の方には食物が入ってこなくなった。このように飢饉があつたのは災害や伝染病のせいだけでなく戦略的な物流の停止や兵糧米の収集によってひどくなつたと考えられる。愛情のより深い者、子より親が先に死んでいく。戦乱によって、こんな哀れなことも起きていた。

教科書には平氏と源氏が戦ってどっちが勝つたとかそういうことしか書いていないけれど、本当はその裏で、とても大変なことが起きていた。教科書にはとくに書いていないけれど、このことはもっとたくさんの人に知ってもらいたい事実だ。

(※寸評:源氏の戦略で都の飢饉が拡大されたことについての説明がしっかりできています。作者が文末で指摘するように、一般に教科書や参考書には戦の当事者名や勝敗の結果しか記述されていません。けれども、戦争の陰には必ず被害を受けた多くの人々がいます。誰が戦争で利益を得、誰が被害を受けるのかをしっかりと考えたいですね。)

**C組 H.W.** この方丈記は、鴨長明が養和の飢饉で苦しんだ人々を思いだして書かれたもの。養和の1年前、源頼朝が兵を挙げた1180年の夏、平氏が支配する西日本では、かんばつによって不作が続いた。平氏が兵糧米をとろうとしても、集まらなかつたくらい影響は大きかつたようだ。養和に入つても、西日本で飢饉がおきた。豊作であつた東国の源頼朝や、北陸地方を支配していた木曾義仲は西日本への物資を平氏と戦っているために止めた。「田舎から米が来ることであつて、それを命の綱にしているのに、それがぜんぜん来なくなつた」と方丈記にもあるように、源氏が物流を止めていたのだ。物資が来なければ「金目のものが金目にならず、食料のほうが高くつく」とあるように、いくらお金を出しても食糧をたくさん買えない。「伝染病まで加わつて」と源氏と平氏の戦いで物資を止めた上で伝染病までと、民衆は源氏でも平氏の戦いをしている訳ではないのに、

民衆が飢饉の被害をうけていたのだ。源氏と平氏の戦いには、このように、もちろん飢饉等の災害も関わっているが、それだけではない。源氏が意図的に西日本への物資を止めたことや、民衆が苦しんでいても戦いをやめず、自分自身を守り続けた平氏、これらの行動も大きく関わっていて、その被害を一番受けたのは民衆である。でも民衆は苦しむ中で「たまに手に入れた食物を相手に先に食べさせるから親子でいっしょにいるものは、きまって親が先に死んだ。」とあるように大事な人・子供を自分を犠牲にしてまで守っていた。この民衆の行動があったからこそ、今の私達がいるのだ。だからこそ、この命を大切に、そして戦いを止めさせ、いつも周りを見渡せる人になることが大切だと思う。難しいことかもしれないが、常にこの方丈記を頭に入れ、二度と養和の飢饉のようなことを起こさないようにしていきたい。

(※寸評:戦争の一番の被害者は、戦いとは縁のない民衆であったと鋭く指摘している作文です。被害の様子も史料を適切に引用しながらいねいに説明しています。また、戦いを止めていきたいという覚悟も宣言されている、とても説得力のある作文です。)

**D組 Y.E.** まず、二年間というものの、飢饉で、ひどいことがあったというところから人々は食べることがなく生活が苦しかったことが分かります。さらに、京という所は、とにかく何をすることも、先だつものは田舎から米が来ることであって、それを命の綱にしているのに、それがぜんぜんなくなったというところから、飢饉のせいだけでさえ食料がないのに、京都に運ばれるはずの食料も源氏にとめられてしまい、もっと食料が足りなくなっていったことが分かります。そして、ここで最も被害を受けたのは土塀のそばや、道ばたに、餓死者が無数にあったというところから京都に住んでいた民衆だということが分かります。なので、民衆は食料不足なのにもかかわらず、変わらずに税をとっていく平氏に対して不満が高まっていきました。そんな中、親子でいっしょにいるものは愛情が大きい親が先に死ぬや、死者がきりがないつがないというところから、休まることなくどんどん死者が増え、民衆がぎせいになっていったことが分かります。このように源氏と平氏が戦ったことによりたくさんの民衆が死者となり、ぎせい者となったため一番の被害を受けたのは京都の民衆だということが分かります。

(※寸評:この作文は、源氏と平氏の争乱の最も大きな被害者は民衆だと強調しています。何度も具体的な場面を引用しながら説明しています。ただ、飢饉が自然災害の側面があることを踏まえ、京以外で暮らす民衆はどうだったのかも説明して欲しかったと思います。)

**D組 N.O.** 平氏が栄えていたころ、源氏は平氏を倒すタイミングをうかがっていた。そして、平氏が治めている土地でききんが起きた際に、源氏は平氏を攻めにいった。

だが、戦乱とききんにより農民の生活はより苦しくなった。雨が降らなかつたり、大きな災害が起こったりして、農作物はみんなだめになった。そのうえ伝染病まで加わり、道ばたは餓死者の死骸が無数にあった。どの時代でも、戦乱にはメリットがほとんどなく、苦しくてあつてはならないものだと感じた。

又、愛情の深い者は手に入れた食物を相手に先に食べさせるため、先に死んだ。このことから、どんなに苦しい時代でも愛情を持ち自分のことを二の次にできる人はいるのだと学ばされた。

(※寸評:この作文が「どの時代でも、戦乱にはメリットがほとんどなく、苦しくてあつてはならないもの」と指摘しています。簡潔な表現ですが、とても説得力があります。ただ、その後の文章とのつながりが分かりにくいので、もう少し工夫すると、とてもよい作文になります。)

**D組 H.S.** 源平の戦いは平安時代の後期からであった。この時代、特に西国がききんに苦しめられていた。そんな中、戦いに備えて平清盛が兵糧米を集めたため、前にもまして庶民

たちは食べる物に困った。さらに、豊作だった東国からの物流も源氏により止められ、西国の庶民はとても苦しい状況にあった。その様子が鴨長明の「方丈記」に書かれてある。かなりの身分らしいかっこうの者が、ただただ、ひもじさに一軒一軒食を乞うて回るようになった。この部分からは、普段は不自由なく生活できているはずの高い身分の人も生活が苦しくなるくらい、大変なききんであったということが分かる。死骸を取り除く手段も分からないので、死体から出る死臭が都に広がり、腐爛して変わり果てていく死体の容貌や姿は、あまりにひどくて見ていられないことが多かった。賀茂の河原なんかでは、死体が多く捨てられて、馬や車も通れないほどだ。この部分からは、臭いや容貌がひどかったり、河原が通れなかったりしていても、どうすることもできない庶民の悲しさが分かる。もし、争いがなければ、ここまでひどいききんにはならなかったはずだ。自然災害と人災が重なりとてもひどい状況になってしまった。どの時代でも、争いをするときせいでになってしまうのは庶民であった。

(※寸評:この作文は「もし、争いがなければ、ここまでひどいききんにはならなかったはずだ」と明確に戦争との関連で飢饉を位置づけています。時代の設定も正確にしていますし、飢饉の様子の紹介も具体的で分かりやすく、とても優れた作文です。)

**D組 S.N.** この史料の背景には、かんばつと、源頼朝と木曾義仲が、京への物流を止めたためによる養和の飢饉が起きていました。ぼくは、特に、第4段落の「土堀のそばや、道ばたに、そういう餓死者が無数にあった。」という所と、第6段落の「～つまり平安京の東半分の死体が、計四万二千三百余体あった。」という所が印象に残りました。小学生たちには、飢饉の生々しい様子と、源氏による物流のストップによって起きた、ということをお伝えたいです。ぼくは、京都に住んでいる源平の争乱に関係ない人たちまでを、まきこまなくても良かったんじゃないかと思えます。なぜなら、騎数は、源氏が2万騎、平氏が4000騎(より集めて士気が低い)で、あらかじめ有利だったからです。確実に平氏を倒したかったとしても、いくらなんでもそれはないと思いました。養和の飢饉の生々しい悲惨な様子を知り、今食事に恵まれていることに感謝したいです。また、私たちの祖先は、こういった飢饉を乗り越えて今の私たちに命をつないでくれたことをうれしく思いました。

(※寸評:この作文は「京都に住んでいる源平の争乱に関係ない人たちまでを、まきこまなくても良かった」と指摘します。京都に住んでいる人々は否応なしに争いに関わられ飢饉の被害にあったと言えますので、少し表現に工夫が必要な所です。なお、作者が取り上げている騎数は、富士川の戦いの時のことで、源氏と平氏の争乱の全体の戦力ではありません。)

**E組 T.K.** この随筆が書かれたのは源平争乱の時代である。源氏と平氏の争いにより、大きな被害が民衆を襲ったのだ。被害の例として、飢饉があげられる。戦いに必要な物は食料と武器。では、食料はどこから得るのだろうか。それは民衆にある。今に比べ、ただでさえ少ない技術、収穫量、人手。また、この頃は天候も良くなかったそうだ。このような事情の中、大量の食料を生産することは可能だろうか。そして民衆は自分達の食料も渡したのだ。その結果もちろん大量の餓死者が出た。養和年間のある年の4月から5月までの平安京の東半分の死体の数は計4万2300余体ほどあった。たったこれだけの範囲で4万5千体以上となると日本全体ではどのような数だろうか。ただでさえ、餓死者により人々が減っていく中、伝染病が流行していた。現代と違い、あまり衛生環境も整っておらず、食料の低下による栄養不足などが要因で流行したのだろう。賀茂の河原などでは死体が多く捨てられ、馬や車が通れないほどだったそうだ。このように人々は源平の争乱の被害を大きく受け、飢饉に苦しみ大量の死者が出た。

(※寸評:「戦いに必要な物は食料と武器」と条件設定して、源平合戦が民衆に被害をもたらしたと先に結論を宣言する論文体の作文です。作文構成としては、とても説得力のある方法ですが、「兵力」が抜け落ちているのが少し残念です。ただ、源平の争乱が飢饉の被害を増大させたことについての指摘が明確ですから、とても分かりやすい作文になっています。)

## (2) 戦略・平氏の敗因

D組 I.U. まず源頼朝が鎌倉で平氏に兵を上げた。そして富士川の合戦で平氏に勝った。平氏はそのとき、西日本は、ききんだった。そのため、諸国の農民は、土地を捨てて、国ざかいを出る者や家を捨てて山に入ってしまう者が出てきた。とうじの兵士は、自分の田にある米を、ひょうろう米としていたので兵士の指揮は下った。しかし関東などの東のほうはほうさくだった。富士川では、そうして平氏がまけた。そして平氏はにげた。その敗走中に平氏は、がししていったはずだ。平氏は、神戸のとりでににげた。源氏は山、平地の東西にわかれて、平氏にいどむとまたも平氏は敗走した。神戸ににげても西日本はききんである。平氏は、兵を集めたいがどうにもならない。翌年は伝染病まで加わっていいほうに向かう様子がちっとも見えない。西日本には伝染病まで広がり平氏も源氏も西日本にいたから多数の死者は出ただろう。しかも平氏は源氏と戦わずして兵に集めようとした人がいなくなり、平氏の数も劣っていた。平氏が海戦は強くて、兵士がいなければ意味がない。平氏はそうやって負けたのだろう。

(※寸評:この作文は、源氏と平氏の争乱について戦いの展開をたどりながら、食料不足が平氏軍を追い詰めていたことを分かりやすく説明しています。しかし、この作文に不足するのは、源平の争いで民衆が受けた被害について全く触れない点です。戦争の勝敗だけに注目するのではなく、戦争が社会全体に与える影響も考える広い視野が欲しいですね。)

E組 A.K. 源氏と平氏が戦った頃、日本では飢饉が起こっていた。平氏が治めていた西日本で起きたのだ。しかし、源氏が治める東日本側は豊作だった。平氏は、源氏に勝つため、兵糧米を集めたが飢饉で米がとれず、兵たちは、お腹をすかして、戦闘意欲がほとんど無かった。これのせいで平氏は源氏に負けてしまったと言える。

そのころの庶民の様子はどうかだろう。特に、平氏側、無いところから米がとられていく。その証拠に、史料には「いろいろな家財を片端から捨てるように安く売って食料に代えてゆく」とある。そうして、家財が無くなれば、次はどうなるのだろう。乞食になる。しかし、物乞いをして、ほいほいと食料をくれることなんてない。豊作の東日本側へ、もらいに行けば良いと思うかもしれないが、平氏と源氏の戦いのせいで、全く無理なのである。こんなことが一年以上あり、とうとう伝染病までもが広がり、病死者、餓死者で都はうめつくされた。史料には、「数えてみると、四月五月で、京の一条から九条まで、東京極から朱雀大路まで、つまり平安京の東半分の死体が、計四万二千三百四体あった。」とかかれている。計算すると、だいたい20万人以上もの人々が、このころ餓死したのである。

餓死は、人が死ぬ中で一番つらい死に方だと言われているが、この時代は、そんな人が20万人以上もいたのだ。源氏と平氏が戦ったせいで拡大されたとも言えるこの飢饉は、いかに戦争が起きてはいけなさを教えてくれる。

(※寸評:この作文が文末で「源氏と平氏が戦ったせいで拡大されたとも言えるこの飢饉は、いかに戦争が起きてはいけなさを教えてくれる」としているのは、とても鋭い指摘です。豊作の東国から食料を手に入れることができなかった事情をていねいに説明することにも成功しています。さらに、時代背景や、東国と西国の気象条件の違いも説明しているので、分かりやすさも光る作文です。)

## (3) 飢饉対策・支援のための国際関係(ネットワーク)

A組 S.N. この頃の社会の様子はひどいものであった。西日本で雨が降らない、台風や水害が続く、など運の悪いことがあり、農作物がみんなだめになった。そしたらどうなるだろうか。今のような人工的なものはなく、自然の力が大切になる農業。そう、想像した通りのことが起こった。人々は食べるものがなくなり、苦しみにおちていく。その様子を、

日本三大随筆の一つとされる鴨長明の「方丈記」がよく表している。食料のために努力しても、「家財を片端から捨てていくように安く売って食料に代えようとしても、金目の物が金目にならず、食料のほうが高くつく」と言う。私も色々考えてみたけれど、このような環境なのではなかなか良い案が思いつかない。しかし、人々は生きのびようと努力する。家を捨てたものもいたそうだ。命の綱である食料がなくなると、こんなにも人々は普通の生活を失うのだ。たまに入ってきた食料も、愛する家族に与え、自分の寿命が縮んでいくこともあったそうだ。こうして人々はついに飢饉におちいり、餓死者が無数にいた。今の時代でも、輸入している作物の原産国に自然災害などが相次いだりしたら、それが食べられなくなるかもしれない。その国の人々を助け、少しでも餓死する人を減らせるようにしていきたい。

(※寸評:この作文は、養和の飢饉と源氏と平氏の争乱の関係について全く触れない点に特徴があります。飢饉を自然災害としてとらえているのでしょう。しかし、現代の日本の食料事情に目を移して、輸入している農産物の原産国に不作が起こると、養和の飢饉と同じようなことになるかと危機感を感じています。ただ、「食べられなくなるかもしれない」から「その国の人々を助けよう」と言うのは、少し身勝手な理由に読めてしまいます。これでは国際的な支援関係とは言えないでしょう。かつての植民地を支配した宗主国と同じ感覚になってしまいます。)

**B組 I.T.** 鴨長明の方丈記という随筆は、源氏と平氏が戦っていた時の人々の様子が、どれだけ辛いかということを書いていてその時の様子がすごくよく分かります。ききんのせいとどれだけ人々が死んだのかなどを生々しく書いています。この中で2つの部分にスポットライトをあててみましょう。1つ目は「朝廷では、いろいろな御祈禱がはじまって、尋常でない特別な御修法が種々なされたけれども……いつまで世間体ばかりつくろっていられようか。」という部分です。この時のききんは特別なものでした。なぜなら、平氏のいる西日本が主にききんになっていたのですが、源氏は平氏を倒すために東日本からの物流を止めてしまったのです。だからこの部分にあるように、米が来なくなつて死する人が増えたのです。2つ目は「こんなに落ちぶれてどうしていいか……もう死んでいる。」という部分です。つまり、人々は生死の間をさまよい、死を目前にして生きていたということです。だから末法思想が生まれても仕方のないことだったのです。このように、この頃の人々はききんだけでなく東日本からの物流を止められたことによって生死の間をさまよい死と共に生きていたのです。街中に死体が転がっている中で。とても辛いし生きる気力を失ってしまうような時代でした。

(※寸評:この作文は、学年全体で、末法思想に触れている唯一の答案です。よく書けていますが、「特別な御修法」の意味を説明しておかないと、分かりづらいと思います。当時の人々は「祈り」や「祈禱」で災害から国を守ることができると信じていました。ですから、祈禱が当時の朝廷にできる、飢饉に対する最大の「対策」だったんでしょうね。)

**C組 E.K.** 平氏と源氏が戦い、源氏が勝ったことには、平氏が勢力をのびしていた西日本に起こった自然災害やききんなどが関係している。また、源氏が勢力をのびしていた東日本はとても安定していた。西日本に送られるはずだったぶっしが戦略的に止められたりした。「いろいろな家財を～～どこへ行っても不平と嘆息の声ばかり」のところでは、いろんな物を安く売っているけれど、お金が足りず、自分たちの食料のほうが高くついてしまう。だから、乞食が増え、その年は最悪な年だったことが分かる。また、「土塀のそばや～～馬や車も通れないほどだ。」からは、ききんや自然災害によって食料がなくうえている人が山ほどいることが分かる。馬や車も通れないほど、というのは、うえて死んでいる人が多く、食料もない生活で、大変この時代の農民は苦しんでいたことが分かる。



いたのです。ただ、その点を除いて、田舎の農民のつらさを説明し、京の「農民」を「民衆」と読み替えると、この作文が「何故、兵士は農民と助け合わなかったのか」と主張している内容は、納得がいく提案です。なお、源氏と平氏の争乱は、平安時代の終末です。)

**E組 A.H.** 源氏と平氏が戦っている時、民衆は絶えず飢えに苦しんでいました。1つ目に「農作物がみんなだめになり、夏の田植えの行事だけがあって、秋・冬のとり入れのにぎわいはない」とあります。度重なる台風や水害で作物が実らず、食べ物が全くないような状況にまで追いこまれました。2つ目に「乞食が道ばたに多くなり、どこへ行っても不平や嘆息の声ばかり。」とあります。不平の声が多い理由は、「貴族や朝廷がききん対策や備えをしていなかった」ことにあると思います。民衆が苦しむ飢えているにも関わらず朝廷は対策を打たずに税を巻き上げているし、武士は物流を遮断してまで戦をしていました。僕は国全体の貴族や武士が、農民をないがしろにし、関心を持たなかった結果だと思っています。もし朝廷がもっと早く、具体的に行動していれば、このききんはここまで酷くならなかったと思います。

(※寸評:この作文が主張するように、飢饉に対する対策を朝廷が取っていなかったことが、養和の飢饉の被害を大きなものにしたとも言えます。奈良時代の朝廷は飢饉対策をしていました。義倉と言いました。しかし、平安時代になると、権力者達は、民衆の暮らしは二の次で、自分たちの暮らしを優先していたのでしょう。とても鋭い指摘です。)

#### (4) 危機的な場面での愛情の大切さ

**B組 H.H.** この史料は、養和の飢饉について書かれていて、養和の飢饉は主に西日本で広がったと言われている。たとえば、この世界で飢饉というと、食料難が挙げられる。飢饉になると、今でも苦しいことが分かる。この分の中ではその飢饉が二年間も続いたというのも書いてある。一番ひどい表現では、「歩いてたかと思うと、ぱたと倒れてもう死んでいる」だ。ついさっきまで歩いていた人が、倒れた時に、もう死んでいる。これほどこの世の中が大変だったことがわかる。さらに、「死骸を取り除く手段も分からないので、死体から出る死臭が都に広がる」と書いてある。ということは、都一面に餓死者がいたことが分かってくる。それだけこの飢饉がひどかったのか分かる。しかし、悪い事だけかと思うと、そうでもない。それは「別れられない妻や夫をもった者は、愛情の深い者の方が先に死ぬ。」これを1回見てあそうなんだ。とそのまま触れないのは、日本人としてはじるべきだ。やはり日本人は優しい。これを見ると、愛情が伝わってくる。この飢饉の中で、少ししかない食料を、思い人に与えられる優しさは、今にも伝わってくる。そう、最後に愛は勝つと同じで、たしかに死にかけだけど、目の前で笑顔が見れたら良いことじゃないか。死ぬのは確かにつらいだろうけど、相手のために命をすてる。これ以上に大きな愛は無いと思います。そう、僕が一番言いたいのは、たとえ飢饉でも、こうして相手が活着しているのなら、僕はその死は無断じゃないと思います。だから、何事にも愛を持って接する事が大事なのです。

(※寸評:この作文は、飢饉の原因には全く触れないで、養和の飢饉のひどさを具体的に説明した上で、飢饉のさなかで人々のとった行動に注目しています。マイナス部分を取り上げるのではなく、ポジティブに受け止められる部分を取り上げて、小学生に伝えることも大切なことでしょうね。なお、「その死は無断じゃない」ではなく「その死は無駄ではない」でしょう。)

**D組 S.K.** 源氏と平氏が戦っていた頃の話は、日本三大随筆の一つとされる方丈記に書いてあるんだ。平安時代末期から鎌倉時代にかけて、自然災害や争乱がおきていた。洪水や大地震がよくおきていたし、保元の乱や、平治の乱もおこり、飢饉で、とてもひどかった。

方丈記に書かれていることで印象に残っていることのひとつは、京都に農作物が全然来なくなってしまったことだ。京都はこの頃、大都市だったけれど、農作物は田舎から送ってもらっていた。すると源氏が東日本からの農作物を送ることをやめてしまった。これは今の日本にも言えることで、自給率が低い日本は他国と戦争をすればこの頃の平氏と同じようになってしまうかも知れない。

もうひとつ印象に残っているのは、夫妻や親子間で、愛情の深いものが先に亡くなったということだ。キリスト教で隣人愛のことは習うけれど自分が死ぬかも知れないという究極の選択で他人を愛することができるのはすごいと思った。このように方丈記のことは、今を生きる僕たちにいろいろなことを教えてくれていると思う。

(※寸評:この作文が取り上げている「保元の乱」「平治の乱」は時代が異なります。源頼朝が政治上に登場しない頃の話で、養和の飢饉とは直接の関係がありません。ただ、この作文の作者は、京都が大都市で農作物を田舎から送ってもらうことで、人々の暮らしが成り立っていたことを踏まえています。そこから、他の国からの食料に頼る、今日のわが国の食料事情を重ね合わせて考えています。そして、親子や夫婦の愛情について、キリスト教の教えを通して考えようとしている作者の意識の高さがよく伝わってきます。)

**D組 Y.N.** 平氏が栄えていたころ、源氏は地方に暮らし、ひそかに平氏を倒すタイミングをうかがっていました。平氏が力をもつようになると、貴族や僧が平氏に対して大きな不満をもつようになりました。そして、源頼朝をはじめとする源氏が兵をあげ、5年間で7回ほどの戦いをして、平氏を滅ぼしました。

このころの人々や町の様子は、鴨長明の随筆「方丈記」を読むとよく分かります。「方丈記」には、「ひどい飢饉で、春・夏、雨が降らなかつたり、秋に台風・水害などが続いて、農作物がみんなだめになった。」「田舎から京に米がぜんぜん来なくなり、どうにもならず、道ばたに乞食が多くなった。」と書いてあります。このことで平氏は食料調達があまくいかず、兵の力が弱くなり、兵の中には脱走するものもいて、どんどん兵が減っていきました。さらに、源頼朝と源義仲が京都への物流を止めたことで、民衆も巻き込んで餓死に追いこんでいきました。戦争は、いつの時代も民衆を苦しめる悲惨なことだと思います。

そんな中でも「方丈記」には愛情を感じる部分もあります。「愛情のより深い者のほうがきっと先に死ぬ。というのは、自分のことは二の次にして、相手がかわいそうだと思うために、たまに手に入れた食物を相手に食べさせるからである。だから、親子でいるものは、きまって親が先に死んだ。」という部分です。自分の子どもを大切に思う親の気持ちが伝わってきます。いつの時代も、大切な人を思う気持ちは変わらないのだと思います。

(※寸評:この作文は、源氏と平氏の争乱と、京の飢饉の様子を簡潔に説明しています。その後で、源氏による物流の停止に触れ飢饉が拡大されたことと、「戦争は、いつも時代も民衆を苦しめる悲惨なことだ」と鋭く指摘しています。この作文が光るのは、源平合戦の戦況と飢饉については簡潔にして、親子の愛情の場面を特に強調している点です。ただ、この点についてはもう少し具体的に説明してもよかったと思います。)

## (5) 食事ができることに「感謝」

**E組 Y.H.** 源氏と平氏が戦っている間、人々は度重なる災害と食料不足に困っていた。資料を見ると「いろいろな家財を片端から捨てるように安く売って食料に代えてゆく」と書いてある。しかし、食料も尽きてくるから、食料を求める人が多く家財よりも食料の方が高値でつくことが多かった。これが1年目だったらしいが、これで終わりではなかった。資料を見ると、「土塀のそばや、道ばたに、そういう餓死者が無数にあった」と書いてあ

る。食料がなくて死ぬ人は今でもいる。昔も多くの人が亡くなった。でも、そこで生きのびた人が自分の先祖だと思えば、食料には感謝しなければならないと思う。今、自己中心的な社会になっていると思う。でも昔は違う。資料を見ると「別れられない妻や夫をもった者は、自分のことは二の次にして、先に食べさせるため自分が先に死ぬ」と書いてある。これくらいできる世の中に今なるべきだ。

(※寸評:この作文は、養和の飢饉の様子を具体的に説明した後で、「生きのびた人が自分の先祖だと思えば」と自分の命の歴史的な連続性を強調しています。その上で食事できることに感謝する気持ちを伝えようとしています。しかし、飢饉がなぜ起きたのか、飢饉が、なぜ、それほどひどいことになってしまったのか、などについての説明があるともっと説得力のある作文になりました。残念です。)

**F組 A.S.** 源平合戦が繰り広げられる前の何年間か平氏が支配している西日本が飢饉にあった。干害や台風、水害が続いて農作物は全部だめになってしまった。京では、西日本の地方から食料が届かないものだから、東日本からくる食料をあてにしていた。こんな中で源氏と平氏が戦を始めた。平氏は兵士を養うために、西日本から兵糧米を集めようとしたが飢饉にあるからちっとも集まらない。それでも民衆からわずかな食糧を取り上げ、戦にいどんだ。その上、源氏が東日本から京へ送る物資を止めた。そのため、西日本では餓死者が大量に出た。死体から出る死臭が都に広がり、腐爛して変わり果てていく死体の様子はあまりにひどく見ていられないものが多かったそうだ。賀茂川の河原では死体がたくさん捨てられて馬や車も通れなかったほどだったそうだ。餓死者をこんなに出さずに済んだ方法はなかったのだろうか。まず、源氏は京へ送る物資を止める必要はなかったのではないか。ただでさえ飢饉であるのだから、止めずとも勝ち目はあったはずだ。もし、止めなかったら、こんなに餓死者を出さずに済んだかもしれない。今回のことを通して、小学生達には、今自分が食事を充分に取れている生活が昔は当たり前ではなかったことを覚えていて欲しい。そして、今の自分の幸せな生活に感謝してほしい。

(※寸評:この作文は、飢饉が異常気象から発生する自然災害であることを説明した上で、平氏の兵糧米の収奪、さらに源氏の取った物流をさえぎるという食糧戦略によって、飢饉が拡大されたことをいねいに指摘しています。その後の飢饉の様子を紹介も具体的です。小学生にも、とても分かりやすい作文になっている優れた作文です。)

## (6) 命をつないでくれた祖先に「感謝」

**C組 Y.A.** 源氏と平氏が戦っていた頃、「運の悪いこと」が続いた。この随筆に「飢饉」や「台風・水害」があったと書かれている。ただでさえ源氏と平氏の戦いで荒れていたのに、ききんが起ったり災害にあった為、食べるものもなく、非常に人々は苦しめられた。2段落に「いろいろな家財を片っ端から捨てるように安く売って食料に代えていくのだが、これは大した物だと掘り出してくれる人もいない。」「ときたま換えてもらっても、金目のものが金目にならず、食料の方が高くてつく」とある。この2文から、物を売っても食べることができず、死んでしまう人々もいたということである。それは農民たちばかりではない。伝染病も広まり、苦しめられた結果、3段落目に書いてあるように、「かなりの身分らしいかっこうの者が、ただただ、ひもじさに一軒一軒食を乞うて回るようになった。こんなに落ちぶれて、どうしていいかわからなくなった者たちが、歩いていたかと思うと、ぱたと倒れて、もう死んでいる。」という状況にまでなった。これは、そこそこ良い暮らしをしていた人々までが食事をとれなくなったことを示している。このように、源氏と平氏が戦っていた時代に生きて人々は、手のほどこしようがないような環境になっていた。それでも、必死に生きようとし、奇せき的に生き残れたのが私たちの先祖である。だから、自分たちの先祖が、考えられないくらい苦しんでいた時を

乗り越えてくれたからこそ、今の私たちがある。そのことに感謝しながら、今与えられている全てのものを大切にしながら生きていかなければならない。

(※寸評:この作文も養和の飢饉の様子を具体的に説明しています。次から次へと悲惨な状況が展開され、圧倒されるような光景です。その上で「それでも、必死に生きようとし、奇跡的に生き残れたのが私たちの先祖である」と命の歴史的な連続性を強調しています。ただ、この作文は、養和の飢饉が自然災害から始まったことには触れていますが、戦乱との関係についてはほとんど述べていないことが残念です。)

**C組 Y.T.** 鴨長明の「方丈記」は「徒然草」、「枕草子」と合わせて日本三大随筆の一つである。

「方丈記」は当時の京都を回想して約30年後に書かれたものだ。この世の無常さや理不尽さが描かれている。源平の戦いは東国の豊作、西国のききんが命運を分けたと考えられている。さらには東国から送る物資を都の外でおさえる等の源頼朝の戦略的な物流の停止によりききんはさらに増大していき西国では金目の物は金目にならず食料の方が高くなったという。文中に「京という所は、とにかく何をすることも先だつものは田舎から米が来ることであって、それを命の綱にしている」とあることから地方からの税があって暮らしが成り立っていることが分かる。なので、源頼朝の物流の停止はとても厳しいものだったのだ。しかも次の年に伝染病がはやってしま道には無数の死体があったという。愛情の深い者は愛情を注ぐ者に食料をあげるの親子の場合必ず親が先に死んだ。現代はものがあふれている。僕達はたまたま幸せな時代に生かされた。僕達が今生きているのは「方丈記」に書かれているような厳しい時代を乗り越えた先人がいるからだ。近年日本で「もったない精神」が世界に注目され、「食料はい棄問題」もとり上げられている。小学生でも1人の人間として全員が考えることができれば素晴らしい世界になると思う。そして改めて今まで愛情を注いでくれた人たちに感謝したいと思った。

(※寸評:この作文は、方丈記の説明をていねいにした上で、引用を最小限におさえながら自分の意見を展開するスペースを確保しています。しかも、源頼朝の物流停止によって飢饉が拡大されたことにも簡潔に説明できています。自分たちの存在があるのは「厳しい時代を乗り越えた先人ガイルからだ」と強調する意見にも説得力があります。しかし、文末の「もったない精神」との関連は説明不足で理解が困難です。)

**D組 M.I** 養和年間のころ、源氏と平氏が戦っている中、春・夏は雨が降らなかつたり、秋は台風や水害など運の悪いことが続いて農作物がみんなだめになってしまった。また、源頼朝が都の外で東国から送られる物資をとめたり、そのうえ木曾義仲が北陸地方を支配したため、京に送られる物流が止まってしまった。そのため、金目のものが金目にならず食料の方が高くなった。忘れてはいけないことは昔、西日本や京都では大きな被害にあったということだ。今私達がここで生活できているのも先祖の方々が生き延びてくれたからだ。私達は先祖に感謝して、命を大切にしなければならない。また、今食事が与えられてるとということにも感謝しなければならないと私は思う。

(※寸評:この作文は、養和の飢饉が自然災害から始まり、源頼朝による食糧戦略により被害が拡大したことを簡潔に説明できています。そして、その歴史を踏まえて「今私達がここで生活できているのも先祖の方々が生き延びてくれたから」と感謝する気持ちを訴えています。少し説明不足なのが惜しいと思います。)

**F組 I.H.** この史料は方丈記の一部だ。この一部を全体的に見てみると、源氏と平氏が戦っている頃の人の様子だ。簡単にこの一部の背景をいうと、源氏と平氏が戦っている時、人の暮らしはとてつらかった事がわかる。その中でも、特に印象に残っているところは、『乞食が道ばたに多くなり、』。その年の春や夏は雨が降らなかつたりがあった。翌

年は、それに加え、『伝染病まで加わって、』伝染病までが流行し、日本の様子はかいめつだ。この2年は、『養和年間』と言われている。こんな事がおき、平安京の東半分の死体が、計42300余体あったと言われている。

君たちは、今幸せだろう。これはあくまでも、日本で戦争がないからなんだ。もし戦争になったら、このような事がおこるかもしれない。今、生きていることにもしっかり感謝しよう。そして、ぼくたちが生きているのは、平安時代に大変なことがあったけれど、がんばって、いや死にもものぐるいで生き抜いた祖先に感謝したい。

(※寸評:「君たちは、今幸せだろう。これはあくまでも、日本で戦争がないからなんだ」とこの作文の作者は、現代の日本と、源氏と平氏の争乱を同じ次元でとらえ、平和の大切さを伝えようとしています。ただ、残念なのは、平安時代末期の争乱と、現代の戦争がなぜ同じなのか、同じだと言える理由は何なのかなどについての説明が全くないことです。)

## (7) 現在のあたり前は「あたり前」ではない

**D組 K.A.** 戦乱や不作により、この時代の人々は、生きるだけでも必死だった。「金目のものが金目にならず、食料のほうが高くつく。」とあるが、このような悪循環で人々はさらに食料に困る。その翌年は「伝染病まで加わって、いいほうに向かう様子はちっとも見えない。」とあるように、ききんに加え、伝染病と人々はさらに生活しづらくなっていった。しかし、これは農民だけに言えたことではない。「かなりの身分らしいかっこうの者が、ただただひもじさに一軒一軒食を乞うて回るようになった。」とあるように、身分のいいものでさえ、苦しんでいた者もいた。また、そういった身分の良い者の収入源は、農民のおさめた年貢だったので、このように不作やききんになると、身分の良い者も苦しんだ。このように、日本が大混乱した事態となったのである。それに比べ、現在は技術もはるかに進み、今では室内で農業ができるようになった。現在のあたり前は、実はとんでもなくかごいことであると僕は思う。

(※寸評:この作文は、飢饉の様子を具体的に分かりやすく説明できています。しかし、飢饉の原因を自然災害だと決めつけているのか、養和の飢饉の歴史的な背景についてほとんど触れていません。そのために、農業技術の違いに視点が向かい、今日の農業生産の素晴らしさを強調する結論になってしまっています。残念です。歴史的事実(養和の飢饉)の客観的な条件をもう少し考えるようにすれば、もっと良い作文になりました。)

**F組 S.K.** 源氏と平氏が戦っていた頃、人々は天候不順が原因で農作物がとれず飢饉の状態が続きました。その上、年貢を多く納めなければいけませんでした。人々は食べる物が足りなくなってしまったのです。食べる物を確保するため、家財を捨てるように安く売って食料に代えていくのですが、換えてくれる人がたまにしかいませんでした。食料が貴重すぎたため、家財と食料の価値が逆転してしまい、食料の方が高かったのです。また、愛情の深い者の方が先に死んでいきました。なぜなら、たまにしか手に入れられない食物を、相手に食べさせたからです。自分のことよりも、相手の方がかわいそうだと思うのです。

この飢饉の状態は、これからの日本でも起こりうることだと思います。日本は自給率40%ほどだからです。輸入先で食物がとれなくなると、日本に大きな影響が出て、源氏と平氏の時代のようなことになるかもしれないと思います。

(※寸評:この作文は、養和の飢饉が自然災害からもたらされたものであるとした上で、食料の不足が食料の高騰を生み出した経済的な側面から説明しようとしています。特に「家財と食料の価値が逆転してしまい」という表現は、他の作文にはなかった鋭い指摘です。また、今日の日本の食料自給率に注目して、日本全体が養和の時代の京都と同じ状況だと警告しています。歴史的な学びを今日の生活を見つめる視点を提示している点でも光ります。この作文で残念なのは、養和の飢饉の社会的背景(源氏による食糧戦略など)に触れていないことです。)